

ジンコ・ソーラー、2018年モジュール出荷13~14GW目指す 銭晶副会長「トップ企業各社の強み活かした協力に期待」

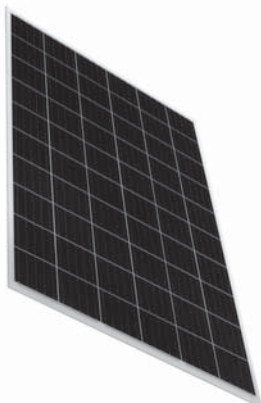
中国の太陽電池メーカーのジンコ・ソーラーは、2017年のモジュール出荷の総合計量が9.8GWで世界首位となった。中東では日本企業とともに、出力117万kWのメガソーラーによる発電事業に参画する。2018年も引き続き世界首位のモジュール販売を目指す。さらに同社の銭晶副会長は、太陽電池製造を専業で手掛け世界首位の太陽電池メーカーとしての強みと、日本の各メーカーが協力することでのソリューション創出にも期待している。

ジンコ・ソーラーは、ジンコソーラーは、モジュール出荷量が世界トップの中国の太陽電池メーカー。世界で6カ所の生産拠点、16カ所の支社を構えるとともに、従業員は合計1万5,000人以上を雇用している。

同社の2017年の世界でのモジュール出荷量は9.8GWで世界首位となった。2018年のモジュール出荷量については13~14GWを目標としており、これを達成できれば引き続き世界トップの出荷量となる見込み。また、2017年の日本におけるモジュール出荷量はおよそ600MWだった。2018年の日本での出荷量については、700MW程度になると見込む。

世界各地での出荷量の内訳

ジンコ・ソーラーの太陽電池モジュール出荷量の各国の地域における割合を見てみると、2017年第3四半期時点で、中国は30%、米国は20%、南米が15%、欧州が8%、中



ジンコ・ソーラーの太陽電池モジュール
 (同社提供)

東・アフリカが合計8%、日本が6%程度となっている。一方米国では、例年第4四半期にかけて出荷量が増加するという。

省エネ住宅は世界の流れ

現状では日本におけるモジュール出荷のうち、7割は産業用、3割は住宅用となっている。ジンコ・ソーラーは、日本における住宅向けの事業を、今後とくに注力する分野の1つと位置づける。また、太陽電池などを搭載した省エネ型の住宅導入は、日本だけでなく、世界的な流れとも指摘する。2017年には、ジンコ・ソーラーの太陽電池モジュールも搭載し、さらに各社のスマート家電や電気自動車(EV)なども組み合わせたスマートハウスも、米国で開かれた展示会において出展した。銭晶氏は、「世界トップの太陽電池メーカーのジンコ・ソーラーと、例えば日本のトップクラスのEVメーカーや家電メーカーによって、それぞれの強みが組み合わせることに注目している。こうした組合せによって、未来の新たなソリューションが生まれるのではないかと期待を込める。」

2.4セント/kWhで売電

ジンコ・ソーラーは、今後もグローバルで首位のメーカーとして、世界各国で太陽電池の販売に注力していく。最近の主なモジュール受注案件として、米国では現地法人を通じて、同国で建設される太陽光発電所に対して、今後3年間で、合計1.75GWの太陽電



銭晶氏

池モジュールを供給し、納入することも新たに決定した。

メーカーとしてのモジュール供給に加えて、ジンコ・ソーラーは自社のモジュールを活用した大規模発電所の運営にも世界で参画する。この中でも、中東のアブダビでは117万kWのメガソーラー建設に、日本企業とともに携わる。同社は、丸紅、アブダビ水電力庁との3社協同で特別目的会社(SPC)を出資し設立。同社を通じた117万kWのメガソーラーを建設運営する。モジュールは全てジンコ・ソーラー製を採用する。発電した電力は、アブダビ水電局へ25年にわたり全量売電するもので、発電所は2019年4月に開始する。同発電所からの電力は、入札の結果2.4セント/kWhの価格で、アブダビ水電力庁に対して長期にわたり売電されることになっている。このプロジェクトは、中東太陽光業界協会(MESIA)の大規模ソーラープロジェクト賞を受賞している。